

滋賀新聞

発行所 京都新聞滋賀本社
© 京都新聞社 2006年

〒520-0044
大津市京町4丁目3番33号
滋賀新聞情報室
☎(077)523-3897
(FAXも同番号)
shiga-np@kyoto-pd.co.jp

11月11日号
毎週土曜日に発行
京都新聞の購読お申し込み
0120-464-468



開業から約90年。当時の姿をとどめる貴重な木造駅

鎧板張りに90年の風格

古い記憶の糸をたどって、その向こうに見えてくるような、懐かしい建物である。木造二階建て洋風鎧板張り建築。古びて色あせているが、入口の赤い屋根の塗装、正面のパステル調の緑も鮮やかだったろう。八日市駅から数百メートル離れた、ちょっと構えが大きい。

駅 町へ

近江鉄道 「新八日市」

九一三年、八日市鉄道の前身である湖南鉄道の八日市駅舎兼本社屋として建設された。その後、琵琶湖鉄道、八日市鉄道と名を変え、昭和十九(一九四四)年に近江鉄道と合併。昭和二十一年に新八日市駅と八日市駅が結ばれるまで、ターミナル駅としてにぎわった。この間、昭和五年にはこの駅から沖野ヶ原の飛行場までの二・七キロに飛行場線が開通、戦時中は軍事輸送の拠点にもなった。



と聞いていますよ」と、駅前の飼料販売「山平」事務所の山田喜美子さん(六十)。この日、孫の修平君(八)日市南小六年が応募して入選したヘッドマーク・デザインを付けた電車が走っているのだと、うれしそうだった。

目まぐるしい変遷にさらされながら、開業以来九十余年。昔のままの姿でひっそりたたずむ駅舎は、傷みもかなり激しい様子で、二階は閉め切ったまま。今では珍しくなった木造駅。広すぎて持て余し気味の待合室と、朽ちかけた木製の改札口も愛らしい。旅人の気分、古びた木のベンチに座っていると、心温まるぜいたくな空間に思えてきた。

駅前には広い青空駐輪場があつて、自転車で埋まっていた。「二百五十台くらいでしょう。ほとんど永源寺や愛東、湖東(いずれも旧町)から八幡の学校に通っている学生さんです。ここから乗れば八日市駅からより五十円安いし、駐輪代がたまたやから」。そう言っていて笑うのは、五年前まで十六年間、改札などの委託業務員をやっていたという森岡和子さん(七十)。窓口業務は土・日・祭日を除く朝の七時から九時まで。改札と掃除が主な仕事で、森岡さんのように地元の人が勤めるケースが多い。

駅を出たところが、近江八幡と八日市を結び永源寺へ続く八風街道だ。駅周辺にはうどん屋やうなぎ屋、八百屋などの店も繁盛していたが、ターミナルでなくなると次第にさびれてきたという。街道を八日市駅の方に向かうと、まもなく親玉饅頭の親玉本店の前で御代参街道と交わる。写真下

御代参街道(脇任還)は、湖東地方を南北に貫き、東海道土山宿と中山道愛知川宿を結びバイパス。東西を横切る八風街道と八日市の町の真ん中で交わっているのだ。街道筋の商店街でもあった「八日市場を育てた御代参街道」というパンフレットを読みながら、街道を歩く。

そして、ちびっと思つた。新八日市駅の盛衰は後世、どのように語られるのだろうか、と。